

# 原発事故の記録

— 「笛竹」の皆さんへ —

福島県南相馬市原町区大木戸字松島三三六ノ一

菅野 幾代

— 南相馬市から —

まず「笛竹」の皆さんに心から御礼を申し上げたいです。原発の爆発で一瞬にすべてが飛び散ってしまったような私達にとって、いただいた沢山の励ましは、皆さんが思っている以上に有難いものでした。「なににもできないけれど」と必ずおっしゃいましたが、今回の災害は被災者同士でさえ、その身になってみなければ本当の辛さはわからないと思われるほど凄まじいものでしたから、想像を絶する状況の中で何度も何度も声を掛け続けていただいたことがどれ程心の支えになったことか。そのおかげで少しづつ、自分の姿を再確認し、とりもどしてこれたのだと思います。本当にありがとうございます。

さて原発の現場からの声をといてみますが、実のところあまりの変化の大きさにいまだに夢を見ているようで何をどう伝えていいのか途方にくれてしまいます。私個人の出来事をお伝えするしかできないのですが、原発事故に関しては、同じようなことが誰にでも起こりうる、もしかしたら明日にでも、という思いがあり何かの役に立てばと記録してみます。

私達の住まいは南相馬市のやや山手寄り、相馬野馬追祭場地のすぐ近くにありますが、幸い津波は届かず地震の被害も少なかったのですが、原発の爆発後は二十〜三十キロ圏に入ってしまった。二〜三キロ走ると立ち入り禁止区域にぶつかる位置です。海あり・山あり・川あり・畑あり・庭ありで経済レベルは低くても自然に恵まれた豊かな暮らしを誇りに思い、余所にあまり出ることもなく、地域の祭りを楽しみに生活してきました。ところが今回の原発事故はそのかけがえのない豊かさを一瞬にして根こそぎ吹き飛ばしてしまっただけです。

— 大震災の日 —

三月十一日の震災当日は、私は仕事場におりました。会社は両親が六十三年間手塩にかけて育て上げたクリーニング店で、姉を社長に三十人程の女性スタッフで営業しておりました。地震の瞬間すぐに工場に走りました。大型ボイラーや地下タンクがあり真先に危険物の心配をしましたから。運良くその日はボイラーの点検日で専門の方が見えておりました。燃料タンクがグラグラ揺れ、灯油がバシバシバシこぼれ出していました。直ぐ電源をおとし全員中庭に避難しましたが次々と地面が波うつように揺れます。建物は父がしっかりと建てた鉄骨製で幸い崩れるようなことは有りませんでした。収まったかと思うと、又立っていられないような大きな揺れが繰り返して一時間以上は外にいました。それぞれの家族の安否は携帯が通じず確認できませんでした。帰宅が出来るものか道路も心配

でしたが、すこし落ち着いてから解散しました。その時点では、まだ誰も原発や津波のことは思っていませんでした。

啓明さんの方はその時、出勤途中でした。午前・午後と隣の鹿島の病院でデイケアセンターの送迎バスの運転を手伝っていたのですが、自宅近くの交差点で止まっていた時だったそうです。ものすごい揺れで道路わきの家の窓ガラスがバリバリ割れて落ちてくる。電柱も信号機も信じられない程揺れ動いており、バックしようとしたら後ろの道路が波打って何本にも見え動けなかったそうです。揺れが落ち着くのを待って一旦家に戻って様子を見、思ったより物が落ちていなかったのも病院が心配ですぐ仕事に行ったそうです。何時もより早く利用者を帰すことになり、海のほうへ向かったのですが津波のことは全く頭になかった。ところがいつもなら青く見える海、松林がなく、高いところに白い波頭が水平に一直線に見えており手前は真黒。木や壊れた建物を先頭に田んぼの中をどんどん波が進んで来る。川は逆流し今にも溢れんばかり。逃げてきた人達に「みんな流されている。戻れ」といわれてあわててUターンした。間に合ってラッキーでした。帰宅時には、来た道は海から遠く離れているにも津波で通れなくなっており、ぐるっと山手のほうを回って帰ってきたそうです。孫を保育所へ迎えにいき、出掛けていた娘が帰宅し、皆が揃った時はほっとしました。

### — 福島への避難 —

翌日、私は会社へでました。一応責任者が集まって打ち合わせと片付けをしました。その時はもう津波ですべて流された社員もいて避難所に毛布や服を届けたりしましたが、死者が出なかったのは本当に幸いでした。次の日の予定も相談したのですがそれっきり集まりませんでした。原発の爆発が報道されたからです。

すぐに原町から脱出渋滞がはまりました。私の家の前は福島方面へ向かう車の列が夜中も続いています。隣にコンビニ、スーパーがあるのですが十二日には食料や水は全く無くなりました。ガソリンスタンドも同じです。並んでももう売り切れでした。私たちは会社の責任もあり、病気を抱えた母もそばにあり、父の葬儀を三月六日にすましたばかりということもあって、直ぐには出ない様子を見ていました。テレビのニュースをかけっぱなしにし、家中の戸を閉め切り、換気扇には目張りをし、外に出るときはマスク・帽子・ヤッケをつけました。断水だったので我が家には井戸があったので、残っていた近所の人達に水汲みできる事を伝え、情報交換と助け合いで心細さをしのいでいました。

三号機の水素爆発の時は、テレビの画面でアナウンサーが「爆発したようです」と叫んだ直後にドーンという振動と爆発音が届きました。それまでは、あわてず落ち着けと自分に言い聞かせていたのですがもうダメでした。一気にすごい恐怖におそれとにかく孫を助けなければと思いました。娘は「この子が放射能浴びたら親の私の責任だ。何とかしなければ」と泣いていました。

とにかく原発から離れようと少ないガソリンを心配しながら親戚のいる福島へ向かいました。(途中、今では高放射能汚染で全村移住

になった飯館村を通るのですが、その時点では沢山の方が飯館へ避難していたのですよ。福島に着いた時はホットしましたが、そこも大変な状態でした。水も食料も無かった。そんな中で子供を抱えた私達を暖かく迎えてもらったのは本当に有難かったです。ビックリしたのは福島では誰も放射能を気にしていなかったこと。せめてもの手伝いと近くの井戸へ水汲みに通ったのですが、誰もマスクも帽子もなく、楽しそうにジョキングしている人達さえいました。「ああ県庁所在地のここはパニックを恐れて危険を伝えないんだ」とはつきり思いましたね。翌日は後から逃げた姉・妹夫婦・母と、福島の中野不動尊という所で落ち合い、この先の相談をしました。少し町から離れた観光地のせいとか、まだお土産屋が普通に営業しており、焼き芋や玉こんにやく等、食料になりそうなものを夢中で買いました。住職さんに食堂のうどんを差し入れていただいたり店の方に甘酒をサービスしていただいたり感激でした。この先はそれぞれどこへ逃げるかわからないということで家族単位で行動することになり、比較的身軽な妹に、母と、父の遺骨を預けて別れました。なんともいえない気持ちでした。姉は仙台に家族がいたのですがもう道路が寸断されており直ぐには行けません。食料がなくてはこの先どうしようと困り、姉・私・息子は友人の紹介してくれたホテルに無理を頼んで移りました。ホテルも断水でしたが食事は出しているだけでした。きちんきちんと食事が出てきたときは、こんな時にホテル食かと不思議な感じでしたね。

— 名古屋の娘夫婦の元へ —

その後は名古屋の娘夫婦から、何度も何度も「福島は危険だから出て。心配で死にそう」と連絡が入り、息子とのネットのやりとりで、飛行機の臨時便を大変な混乱の中で取ってくれました。けれども空港にたどり着くのも混乱した交通状況の中では綱渡り状態。不安の為ぐずる孫を「泣くな」と叱りつけ引きずるようにして移動したのも忘れられません。ごったがえす空港ではフロアに散乱する毛布にくるまり、友人が差し入れてくれた驚くほど大きいおにぎりを食べ、遅れる臨時便を待ち、やっとの思いで名古屋へ向かいました。セントレア空港についた時は、なんだか異次元へワープしたようでした。そこは全く何事もなく、物も人も溢れかえっていました。私達はいえば全員リュックを背負ってヨレヨレ。華やかなホテルの朝食の時、もしもの為にとティーバックをこっそりポケットに入れたりして、まさしく着の身着のままの原発難民状態でした。次の日には身ぐるみ・靴まで買い物しました。でも後から考えると着替えたのはとても良かった。スクリーニングで靴から放射能が出た方がいましたから。風評被害の前でしたが周囲への汚染を心配せずにすみました。名古屋では娘の夫の両親をはじめ、周りの皆さんからも本当に良くしていただきました。何から何まであんなに助けて頂いたのは生まれて初めてです。今まではどちらかというと長男の嫁として人を迎えてお世話する立場にいましたから、はじめてお世話される方の気持ちを経験した気がします。一生でこんなに助けていただいでどうお返ししようと思う程です。お世話して頂いた場所はとてもいい所で昔ながらの隣組や親戚の輪の中にすっぽり入れていただいた感じ。住まいは誰も住んでいなかったという昭和初期の

建物で、ギシギシと戸を開けたら黒光りするトトロの階段があり、まっ黒黒すけがザーツと逃げ出す音が聞こえるよう。建具職人のおじいさんが建てたというだけあって、床はぬけそう、手すりはおちそうという状態でしたが、とても凝ったレトロなお家でした。仏壇も写真もそのまま、その隣へ我が家から持ち出した霊璽を置かせていただき毎朝拝みました。向かいの奥様は「私が出るのはこれだけだから気にしないでね」と数日間食事を届けてくださり、そのおいしかったこと。お花も花瓶ごと届けて下さったり、そのさりげない手助けの仕方がとても見事で、不自由な生活の中、本当に助かりました。

娘夫婦は「せつかく来たんだから楽しんでよ」といろんなところに案内してくれました。名古屋城でコスプレイベントを見たり熱田神宮へ参拝したり。でも心がどうしてもダメ。楽しめない。「あはは」と笑ってはいるが凄く不安が心の中にある。どうしようもない気持ち。啓明さんと二人毎朝早くから眼が覚め、ひっそりお茶をすすりながら、小さな音でテレビの原発ニュースを見る。どうなるんだろうと思うと涙が出てきてしまう。一方で新聞のチラシでパートの募集をチェックし、ここなら通えるかと、ここで出来る仕事を真剣に探したりする。心は揺れ動く大地に乗ったまま、津波に流され漂流してそのまま、全く心の内部大震災が続いたままです。その一方で変な話ですが妙な幸福感も味わっています。末娘とその三歳の男の子・息子と私達の五人一緒だったので、毎日家族で過ごしたのが初めてでした。仕事もなく時間におわれることもなく、いつもみんな一緒にごはん作って食べてせつせと掃除して、なんか肩寄せあって連帯感ありましたね。名古屋の孫ともこんなに一緒にの時を過ごせるなんて考えてもいませんでした。卒園式にも出たし、いろんな公園で遊びましたが、本当に楽しかった嬉しかった。

名古屋の皆さんは「このままこっちにいたいらい」と言ってくれましたが、私たちはそう簡単には決心できない。息子は職場から呼び出しが来るとさっさと一足先にもどってしまい、私たちも看護学校に通っていた末娘の転校先がようやく決まり名古屋に残ることになった時点で一時原町に戻ることになりました。「なんであんな所に帰るの」と心配されましたがとにかくコソコソと帰った。帰宅時、はじめて海辺を通った時は、何度もテレビで見えたにもかかわらず眼前の風景が信じられない。見渡す限りどこまでもどこまでも続くガレキの山。月並みですが只々涙が溢れ言葉が無かった。田植えのなかった田んぼが広がる風景も本当に異様で辛い風景ばかりでした。原町はまだいろんな機能がストップしてました。郵便も宅配も届かず物流がないので食料もガソリンも不足。回りから見捨てられたような状態でした。夜は灯りのついている家が少なく、町中真っ暗でしたが残っていた人達同士は励ましあって頑張っていましたね。私達が頑張らなければこの町は消えてしまう。何とかしなくちゃという気持ちにもなります。少しずつ復旧してはきましたがちよつとした出来事でもうダメと思ったり、頑張ろうと思ったり心が振り子のように振り回される毎日でした。たくさんの方が線量計を持ち歩き「お宅は放射能はどの位あるの」が挨拶がわり。学者も報道者も次々やって来ましたが、聞けば聞くほど何を信じたらいのかわからなくなる。そのうち震災では助かった人達の死が、今頃になって伝えられてくる。特に年配の方が避難所を転々として、誰も居ないところで亡くなっている。病院も閉鎖解除に時間がかかり医師も看護士も少ないまま。私の母も病院への受け入れに大変でした。

## — 今思うこと —

最初は冷静に現実を判断しようと思っていました。日々の線量を記録しグラフ化し自宅のホットスポットをチェックし、いたずらに恐れることなく事実を客観的に確認し・学習し・誰も経験したことのない被害に対処していこうと考えていました。未来への可能性を探る為に此処にいることに意味があると思っていました。しかし数ヶ月たった今、自分の心にある深い悲しみは理屈ではないと痛感しています。放射能の被害の実態はこれから調査され・記録され・研究され一定の基準が示されるでしょう、私達もそのデータの一部になることでしょう。でもそれが何でしょう。はつきりしているのは、全てのもはもう元には戻らないということです。確かに今すぐの被害は見えない。しかし空も海も山も、歩く道端の草花さえ、眼に触れ手に触れるすべてのもの、吸っている空気さえもが汚染されている。この見渡す限りの野山をどうやって除染するのですか？ 方法さえ手探りで、誰もどうしたらいいのかなんて本当には解っていない。この地に居ると除染なんか不可能に思えてしまいます。こんな所でどうして安心して子供たちを育てられますか？

地域再生のかけ声もありますが、原発には気の遠くなるような長期の管理が必要なのは皆さんもよくご存知ですよ。それもいつ何がおこるかわからない状態が続くのです。今、目の前にある様々な問題は政治と法律の場で否応なく決定されていきますが、自分たちの生きる場所はそう簡単に決められない。今まであまり外に出なかつた東北の人達があの爆発で一気に全国にちらばった。今、様々な土地で自分個人の人生と家族を何とかしなければならぬ。お金も必要。生まれ育つた故郷への断ちがたい思いもある。反面様々なしながらみからの開放という大きな声では言えない自由感があるのも事実。何とかとりつくるってきた人間関係が今回の出来事でむき出しになる場面もあり、誰もが何処でどう生きるか考えざるを得ない。啓明さんは「汚染されたところに居られないのは当たり前だ。放射能とたたかってどうすんだ」といたってシンプル。息子はといえば「どこに逃げても同じだ」とパソコン情報をみながらシニカル。私だけが「お墓があるのに」とか「会社はどうする」とか「誰がここを守るの」とか、ぐちゃぐちゃしています。結局のところ「私はどう生きたいの、何をしたいの」つまりは、自分の意思でどこに居ると決め、出来る限りのことをしていく。それだけです。誰にぶつけないのかわからない大きな怒りがありますが、東電がひどい、政府のせいだ、というだけではどうしても終われない。原発問題は地球問題であり明らかに自分達にも責任があるからです。なんだか難しい話に入りそうですが、日々の生活には笑いもあり楽しさもあります。時々ふつとわけもなく涙が出たりもしますが、とにかく元気に過ごしていますから安心してください。今回、原発難民として逃げ回った時のことは「たまげだごどや、あざれだごどいっぺあつたし、あまだの人から恩義をうげだし、そのうぢいっさあつたら語つから楽しみにしてでくいろな」ということです。では、笛竹の皆さん又必ずお会いしましょう。いつかは笛を吹きに南相馬に来てください。その時には、新しい道がみえていて、未来を語りあえたらいいですね。

## 原発事故の記録

—「笛竹」の皆さんへ—

福島県南相馬市原町区大木戸字松島三三六ノ一

菅野 啓明

原発事故により原町を出る時は、自分たちはもう二度とこの地には戻れないかもしれないと思い、密かに先祖の霊璽を持って出ました。

「笛竹」で知り合った方達から安否の電話やメールを次々といただき元気づけられ、見舞金や笛まで送って頂き有りがたかった。でもいざ笛を口にしてもどうしても吹くことが出来ない。妻のほうは箏が弾きたくて弾きたくていたので、いただいた見舞金で箏爪を買おうと楽器店に電話をしたらすぐに貸箏をもってきてくれ、被災者のためと無料で貸し出し、爪はプレゼントですとのことでした。皆の親切さに妻は泣き泣き弾いて、やっと気持ち落ち着いたと言っていました。近所の皆さんにもささやかな御礼として演奏を聞いてもらい、とても喜ばれて嬉しかったけれど、やはり自分はそれ以上吹く気になれずどうしようもありませんでした。

毎年七月に行われる相馬野馬追いも野馬原の放射線量が高いため見ものの行事はすべて中止。妻の実家の前を通るお行列も中止となり、生まれて初めての事だと寂しそうでした。それでも原町だけの祭礼が相馬太田神社で行われ、私達二人も雅楽（龍笛・楽箏）で参加できました。本年度出場予定の人達が白鉢巻・陣羽織・袴姿で避難先から戻って参加し「来年は原町で野馬追を実施しよう」と氣勢を上げていました。

毎日線量計で家の周りを測っています。台風の大雨の後は線量も少し下がりましたが今では横ばい状態で思ったようには下がりません。

私達の年代はいいけれど子供たちにはとても心配でここでの生活はさせたくないです。この地を離れて生活しようかとも考えましたが何処に行こうとも日本全土に原発がありとても無理と断念しました。

「笛竹の集い」の時はそれまで全く吹けなかったものでどんな音が出るのかとても不安でした。自分だけでなく災害にあわれた方達は皆おなじだったと思います。笛も箏も音楽は心そのまま音に出てしまい誤魔化せないと思いました。いろいろ複雑な思いはありますが、これからも自分なりの笛を吹いていこうと思っています。